

評 私はこの綴方を涙なしに讀む事は出来ませんでした。「私はいつも寢床へ入れば泣くのです、心で泣いてゐるのです。心で泣けば自然に涙が出るのです」何とあうすばらしい直截な表現でしやう。私は何と言つて慰めてよいか判りません。皆違つた世界に居るのです。各々が自分の城を堅く守つて一步も他を見る事がないからです。お互いの共通点同情心がないからです。私は此作者がひねくれてゐないとは言ひません。大人は只夫のみを攻めるでせう。然し作者もそれを自認してゐるのです。だが其ひねくれるに至つた経路には十分同情に値するものがないでせうか、非難する大人でさへも此位置に置かれたならば、果たしてひねくれずに居られるでせうか。私はあらゆる大人達に自分の氣分に任せ、氣まぐれに純な子供の心を傷け、永久の不具とならせない事を切に祈ります。

又私は作者にいつた。「あなたの純眞な告白に打たれない人はありません。無理もないと思ひます。然しそれはあなたとしてどうする事も出来ない、運命とあきらめるより外ないので、諦めた上で、更にあなたの父や母を愛してあげて下さい。夫が人としての、誰でも、正しく進むべき方向で、又あなたを窮地から救ふ唯一の道なのです」と。私は此文につき或雑誌に次の様にかきました。

「涙」といふ一文を讀んだ時自分は思はず躍り上つた。此數年來尋ね尋ねて尋ねあぐんだものを今見付けた氣がした。そして微かながら、其處からの光が自分の行路を照らしてゐる如く感じた。

勿論此文は精神態度が立派だとはいへない事は、かの(同誌中)不具兒の文と同じである。けれど夫は暫く許さなければならぬ。彼は今本當の自己を見る道程にある。道程に上つた許りのものを餘りに攻めてはならない。夫よりも眞實眞剣な心の叫びによつて何を求めてゐるかに耳傾けなければならぬ。此立て直された態度は、やがて自己を教育して堅實な人格を築くであらう事を、信ぜねばならぬのである。

次の時間に之を取扱つた當時の光景は今でもありありと目に浮かぶ。自分は此作者を賞賛した。一見不良少女と見える——常に虐げられ通して表面服従しつつ、内心反攻を以て漸く自己を生かして來た成績も佳良でなし今迄賞められた経験のない——彼女は耳疑う如く瞳目してゐたが、やがて明かに感激の色が動いた。「傑作である。然し皆の前で讀むか。(甲は本人が望まぬ時は別だが大抵讀む事になつてゐた) 好まぬなら強て讀まんでもよい」といつた。然し彼は意外にも「讀みます」といひ出したのである。

讀者は或は此場合の教師の態度を難ずるであらう。あんな人を呪う詞を兒童の前で讀ますとは、と。然し兒童は或地位を有し心の掛引で動く大人ではない。心と心の許し合つた(と信じてゐた)子供同志と教師の間に遠慮は無用であると信じたからである。毛頭悪い影を心に投げないと信じたからである。否水火尚辭せざる彼女の眞摯熱烈な態度が寧ろ好き影響を残すであらう事を信じたからである。

讀んだ結果はどうであつたか、讀むこと半にして聲は震え目に涙が輝いた。一同頭を上げるものはない。進むに連れて歎歎嗚咽!自分は手を擧げて制した——讀む事を止めてもよい——然し彼は夫でも最後迄讀む事を決してやめ様とはしなかつた。之を聞いた子供は文とはかうしたものか、生活に立脚せねばならぬものかと自己の體驗の如く感じた。

子供の目はかうして精神的に開けて行つた。目が開けたといふ事は又書く手が開けた事でもあつた。然し先にもいつた如くかうした惨苦な暗黒な人生を明る子供に見せすぎた自分を難ずる人があるかも知れない。此非難の意味は自分にも分らぬ事はない。然し明るいとは何だ? 暗いとは何だ? 餘りに大問題である……

注

「村の子供」掲載 大正十一年か十二年作
評は木村文助

p 192~197 原文のまま

「涙」は合唱劇「村に咲く花」の脚本に挿入され演じられた。多くの観客に感銘を与えた。

2011、2、6

北海道北斗市総合文化センター